特集にあたって

原　田　健　一

現在，急激に進むデジタル化のなかで，アメリカ的なグーグルの戦略やＥＵ的なオープンデータ政策など映像という文化資源の共有化をめぐってさまざまなことが行われ，また議論もされている。当然のことながら，こうした欧米の動向を紹介し，研究することも行われている。しかしながら，欧米でデジタル化による文化資源の共有化が大きく進められているのに，日本社会ではほとんど進展していない。どうして進まないのか，デジタル化というグローバルな展開のなかで，実証的かつ実践的な研究をすることが求められている。

こうした問題に対して，わたしたちは，日常生活に遍在している映像とはそもそもどういうものなのか，人びとが映像をどう日常で利用し，生活しているのかを捉え直し，映像をデジタル化し文化資源として共有化するのにふさわしいシステムを，「地域」という枠組みを設定した作業モデルを構築することを通して研究しようとしてきた。つまり，映像をデジタル化し集合化してデータベース化するだけでなく，文化資源としてどう共有化することができるのか，さらには，それにふさわしい社会的なシステムをどう構築したらいいのか。アーカイブを実際に構築することを通して研究するという手法によって，映像の社会的なあり方，その文脈を探ろうとしてきた。

ところで，地域の映像をアーカイブの手法で研究する場合，①映像の発掘・整理，②映像のデジタル化とその内容調査，およびデータベースによる集合化による比較の研究，③映像の公開，利用システムの構築という３つの段階に分けて考えられる。デジタル映像のアーカイブ研究は，こうした一連の流れを総体的にデザインし，実践的に社会化することを通して，映像を文化資源として批判的に再定義，再構築する研究といえる。

今回の小特集では，最初に原田健一「映像アーカイブによる中間的コミュニケーションの分析」で，地域における映像デジタルアーカイブのマス・コミュニケーション研究あるいは地域メディア研究，さらには村落社会学の研究をもとにした理論的位置づけをおこない，具体的に角田勝之助の写真の分析し，映像メディアの普及とその受容がどう行われているのか明らかにしている。

つぎに，②としては，角田勝之助の写真の内容の分析のもとにもなった聞き取り調査である原田，北村順生，榎本千賀子によって行ったインタビュー調査を榎本千賀子が構成した「「村」に暮らす，「村」を写す ― 角田勝之助（福島県大沼郡金山町）聞き取り」を収録した。角田の写真の背景にある村落コミュニティのあり方について聞いたものを，ある程度項目ごとにまとめている。また，十日町などで映像を展示し，上映しながら行った聞き取り調査の実際について，どういう風に映像を使い，どんなやり取りをしながら調査をしているのか，北村順生「地域映像アーカイブの活用に関する一考察～十日町情報館ワークショップ実践の試み～」が報告をした。調査の目的，あるいは内容によって，どういったやり方があるのか，調査の事例として考えていただければと思う。

③は，映像データベースの実際についてどういった調査が可能か，古賀豊「映像アーカイブと Folksonomy: Topic Models / Latent Dirichlet Allocation の応用」で，今回，Topic Models / Latent Dirichlet Allocation を使ったデータ分析を行い，今後どういったことが可能なのかを報告している。この領域もさらにさまざまな研究方法が開拓されるべきところである。

地域において映像アーカイブを用いた研究は，まだ始まったばかりで，今後，さらなる試行錯誤が繰り返される必要があるが，こうした過程そのものも提示しながら展開する必要が，現在，求められてもいる。2013年に刊行した『懐かしさは未来とともにやってくる ― 地域映像アーカイブの理論と実際』(学文社）はそうした試みの一つであるが，今回の小特集も，その後，展開された新たな調査や研究，あるいは研究方法について提示し，そうした必要に応えたものである。